

研究員の主張

「総合学科」で日本の高校は変わるか？

～ 高校教育改革のパイオニアに求められる役割 ～

新しい学科の誕生

平成六年四月、全国で七校の総合学科設置校が誕生した。「総合学科」とは、一言で言えば普通科と職業学科（商業科、工業科など）の融合体である。すなわち、高校時代に普通科の科目と職業学科の科目が同時に学べる「一度で二度おいしい」制度といえよう。

総合学科の構想は、平成三年四月の第十四期中央教育審議会答申で提唱され、平成五年二月の高等学校教育改革の推進に関する会議・第四次報告、高等学校教育の改革の推進総合学科について」で、その具体像が示された。すなわち、現行の高校制度が抱える問題点として、普通科は進学、職業学科は就職という固定的な考え方に結びつきやすく、学校間の序列化や偏差価値偏重の進路指導といった問題を生じさせる一因となる、普通科にも就職希望者、また職業学科にも進学希望者が相当数いるにもかかわらず、そうした生徒への対応が不十分である、産業・就業構造がめまぐるしく変わる時代にあつて、必ずしもすべての生徒が高校進学時点で将来の

進路決定を行っていないわけではない、ことなどを挙げ、高校教育改革の基本的な方向を、教育内容や教育方法のみならず、学科という枠組みにおいても推進するという新たな発想の下で、普通科と職業学科とを総合するような新たな学科を設置することが適当」とされたのである。

平成十四年度時点で、総合学科は全都道府県の百八十六校（全高校の三・四％）に設置されている。山形県では、平成七年度の庄内総合高校（旧・余目高校）を皮切りに、鶴岡中央高校（平成十年年度）、天童高校（平成十一年度）の三校に総合学科が設置され（表1）、平成十六年度には高島高校に設置が予定されている。なお、文部科学省では、「公立高校の通学範囲（学区）全国で五百程度」に少なくとも一校整備されること」を当面の目標としており、改革は現在進行中である。

多様な選択科目

では、総合学科ではどのような教育が行われているのだろうか。

総合学科のカリキュラムの大きな特徴は、

必修科目に比べて選択科目が非常に多いことである。例えば、庄内総合高校では、一年次はほぼ必修科目で占められるが、二年次は三十時間中十六時間（五三％）、三年次は三十時間中二十三時間（七七％）が選択科目となる。選択科目には、国語や数学といった普通科目の他、プログラミングや社会福祉基礎、中国語といった、それぞれの系列の特色を表す専門科目が用意されている。

生徒は入学後、「産業社会と人間」という必修科目の中で、働くことの意味を学んだり、適性検査や自分史形成を行ったりしながら、将来の自分の進路（進学か就職か、またその具体的な方向性）を考える。そして、放課後などに担任教師などとの面談を繰り返しながら、二年次以降の時間割を作成していく。

その際、基本的には自分の進路に合った系列」や、そこに含まれる科目を中心に選択することになる。例えば、文系大学を志望する場合には「人文系列」、福祉関係の就職を志望する場合には「保健福祉系列」といった具合である。もっとも、いわゆるコース制とは異なり系列の「縛り」はないので、複数系列の

荘銀総合研究所
研究員
山口泰史

表1 山形県内の総合学科設置校

校名	庄内総合高校	鶴岡中央高校	天童高校
所在地	余目町	鶴岡市	天童市
設置年	平成7年度 (9年度より余目高校を改称)	平成10年度	平成11年度
設置前の学科	普通科	鶴岡家政高校 (普通科・家政科) 鶴岡西高校 (普通科・商業科・事務科)	普通科 商業科
定員(1学年)	160名	160名*	200名
選択科目 (各年次30時間のうち)	1年次 2時間 2年次 16時間 3年次 23時間	1年次 2時間 2年次 16時間 3年次 23時間	1年次 0時間 2年次 14時間 3年次 20時間
系列	文科学系列 スポーツ系列 生活福祉系列 産業クリエイト系列	国際交流系列 情報科学系列 デザイン・美術系列 家政科学系列 社会福祉系列	人文科学系列 自然科学系列 情報システム系列 経営ビジネス系列 国際文化系列 保健福祉系列

*総合学科の定員。他に、普通科(人文社会コース、自然科学コース)160名、温海校(普通科)40名がある。

理想と現実の間で

科目を選択することも可能である。

しかしながら、実際にはこの「系列」が、時間割の作成に当たって生徒の「縛り」となっているケースが多い。その第一の理由として、卒業という「出口」から先、すなわち進学や就職の現状が旧態依然であることが指摘される。

このうち、進学については、特に国立大学を志望する場合、受験科目の多さがネックになるため、そうした進路を志望する生徒に対しては、教師が時間割作成を「系列に沿って強烈に指導」(天童高校教務部)せざるを得ない。ただし、受験科目が少ない私立大学などを志望する場合には、受験科目を集中的に履修できるため、「普通科より有利」(同)なこともある。

一方、就職についても、最近は簿記一級やヘルパー一級といった「資格」が重要視されるために、こうした資格習得に向けたカリキュラムが、結果的に「系列」に準拠した時間割となってしまう可能性も否定できない。

また、現行の規定では、生徒一人一人の翌年度使用教科書の申請を、前年度の七月に県に報告しなくてはならない(最終報告は十一月)。これは、極力在庫を出さないようにという出版社側の事情を考慮したものと考えられるが、生徒を出口から先へスムーズに送り出すためには、この規定が結局、生徒一人一人が卒業後の進路を「一年次の六月」という極めて早期に決定することを意味せしめることとなる。それゆえに、高校入学時点で卒業後の進路を決定していなかった生徒は、わずか三カ月の間に「決断」を迫られるのである。

過渡期の先にあるもの

これまでの高校選択では、難関大学への進学者数や、就職希望者の内定率といった「実績」が判断基準となり、それらが上位ならば「良い高校」、下位ならば「良くない高校」とされてきたきらいがある。したがって、良い高校に進学した場合は、そこでの三年間は次(卒業後)のステージへの準備期間であり、「良くない高校」に進学した場合は、理不尽な劣等感を抱かざるを得なかった。

高校時代(十代後半)というものが、子供から大人への脱皮期として、人格形成上、極めて重要な時期であるにもかかわらず、高校生として過ごす三年間そのものの価値が、これまで軽視されてきたように思えてならない。これでは青春の垂れ流しではなからうか。

総合学科は、高校教育改革のパイオニアとして、現在の高校教育が置かれた現状に風穴を開けるきっかけになりうる。なぜならば、そこで用意されたカリキュラムは、学ぶ楽しさや喜びを、これまで以上に体感できる可能性があるからである。もちろん、勉強だけが高校生活ではないかもしれないが、むしろ充実した学習環境があつてこそ、部活動や交友関係などの課外活動も充実し、ひいては高校生活全体が充実したものになると確信している。

したがって、あくまで理想を追求するならば、進学における推薦入試制度の充実や、資格にとらわれない人物重視の就職採用など、「出口の改革」も同時並行で行うべきである。

総合学科が誕生して十年足らず。いまだ過渡期としてさまざまな問題を内包しているが、それらの試練を乗り越えた時、そこには本来の青春のあるべき姿が迎えてくれるに違いない。